

狩野山雪 奇想を楽しむ

多摩美術大学美術学部芸術学科教授 小川 敦生

1. はじめに

■ただならぬ画家だった狩野山雪

私は今、日本経済新聞をはじめいくつかの媒体に割と頻繁に寄稿する一方、ラクガキストと名乗り、すごく下手な絵を描くのを趣味にしています。

さて、今日のテーマである狩野山雪という画家のことをご存知の方がどれくらいおられるかわかりませんが、まず注目していただきたいのが「奇想」という言葉でして、そのことから何か面白そうだなと思っていただくことからスタートしたいと思います。山雪は関ヶ原の戦いよりちょっと前の 1590 年生まれですから、実質的には江戸時代初期に活躍した画家と思っていただければ結構です。狩野派というのは將軍家に仕えていた主流の画派なのですが、山雪はちょっと傍流に位置していたことにも期待していただきたいと思います。そして学究的な側面もあるなど、ただならぬ画家であったようです。

2. 雪にこだわる

■日本人は雪を描くのが結構好き

今日は狩野山雪をテーマにするということですが、まずは「雪」にこだわってみたいと思います。日本人は雪を描くのが結構好きで、世界的に見ても珍しいことのように思っています。その代表例として挙げたいのが世界的にも有名な歌川広重の「東海道五拾三次之内 蒲原 夜之雪」です。山雪は江戸時代初期ですが、広重は江戸時代の終わりごろですね。雪の上の足跡をていねいに描くなどとても詩情豊かな作品で、

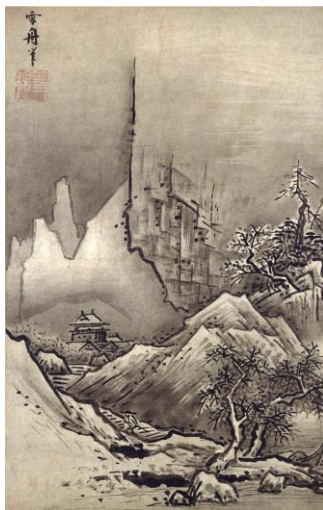


図 1

こういう表現は世界的に見てもあまりないのです。

日本人が雪を愛した歴史は、かなり古いと思っていただいてもいいと思います。源氏物語にも枕草子にも雪が登場します。例として次の和歌を挙げました。有名なのは鎌倉時代初期に編さんされた百人一首の「田子ノ浦に 打ちいでてみれば 白砂の 富士の高嶺に 雪は降りつつ」(山部赤人)で、この元となった和歌が「田子ノ浦ゆ 打ちいでてみれば 真白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける」(万葉集)です。どちらも雪を見てしみじみとする様子を詠んでいます。ここで注目すべきは万葉集の「降りける」が、百人一首では「降りつつ」となっているところです。「降りける」は単に降りましたよという「結果」ですが、「降りつつ」はいま降っているという「継続」を表していて興味深いです。

雪の結晶のデザインを着物や器や印籠などに使うということが、江戸時代に行われていました。雪の結晶はミクロの世界なので、顕微鏡とかがないと観察が難しいのに、早くも江戸時代から柄になっていたというのはすごいですね。雪の結晶を図案化したのが、古河藩主の土井利位(としつら)という人。彼は雪の結晶を長年観察して「雪華模様」を生み出し、広く民間に流布しました。

■現実の風景としてあり得ない？

日本には雪という字を名前につけた画家がたくさんいます。雪舟、雪村、俵屋宗雪、狩野探雪、清原雪信、月岡雪鼎、小村雪岱など。雪の名前を号にするのも、雪に対する思いの表れなのでしょう。この中で一番有名なのが雪舟ですね。「秋冬山水図」(室町時代・15 世紀末～16 世紀初、東京国立博物館蔵 国宝)＝図 1＝は雪を配して冬の状況を描いているのですが、中央部の垂直のラインは何なのでしょう。空が割れている感じですね。ちょっと現実の風景としてはありえない。雷でもなさそうだし。何とも不思議な風景ですが、雪舟の代表作として国宝に指定されています。

■謎解きも織り込んだ面白い「文字画」

次は雪村です。桃山時代に活躍した非常に面白い画家で、最近わりと注目されています。「雪月花文字画」という作品は、雪村が描いたものを江戸時代に狩野養信という人が写した絵、すなわち模本です。写すに値する理由があったということですね。今回の講座でこの作品を出したのは、「雪月花文字画」という作品名によるものです。雪月花というのは日本で伝統的に愛されてきたモチーフですが、「文字画」というのはどういうことでしょうか。文字が書かれているけれども、「画」ということは絵でもあるのか。いささか矛盾したタイトルですね。面白いのは、一番上の文字の上下左右をひっくり返すと「雪」になるのです。雪村は雪という字をわざわざひっくり返して書いたんですね。真ん中に書いてある「月」も裏返しになっています。一番下は「花」ですが、その文字の一面から枝が伸びて花を咲かせています。謎解きも織り込んだ、非常に面白い作品です。

■貴重な女性画家だった清原雪信

次は清原雪信という江戸時代の画家の「菊慈童図」という、中国の故事に題材をとった作品です。この画家は女性です。昔はプロの絵描きになれる女性はなかなかいませんでした。当時は男社会だったので女性がほとんどいない中、雪信は貴重な人です。女性っぽい描き方だとレッテルを張るのは問題がありますが、私にはやはり柔和な表現がなされているように見えます。幕末になると葛飾北斎の娘の応為という画家が最近よくクローズアップされています。



小村雪岱の「雪兔」（1942年、清水三年坂美術館蔵）＝図2＝は雪と、雪で作った雪兔を描いています。兔の目には赤い実をちょちょっと乗せていて可愛いです。雪岱は画家というよりも、挿絵や本の装丁が有名です。少し前の大正時代に神坂雪佳という、やはり雪のつく大好きな作家がいます。



ちょっと時代が戻って、江戸時代中期の円山応挙の「雪松図屏風」は、「雪の絵と言えは」で必ず登場する代表作。三越前駅の近くにある三井記念美術館が所蔵している国宝です。応挙は写実的な絵をよく描く人ですが、この絵のように、金地の上に雪をかぶった松の木が浮き上がって見えてくるというのは、なかなか幻想的です。雪の部分は白い紙の塗り残しです。こういう絵は注文で作っているのだから、注文主を満足させるために描いています。



■西洋にも雪の絵はあった

西洋に雪の絵がまったくないわけではありません。代表的なのがピーテル・ブリューゲルの「雪中の狩人」（1565年、ウィーン美術史美術館蔵）＝図3＝です。16世紀ですから雪舟や雪村らと同じ時代。北の方の緯度が高い地域の画家だったので、雪の光景には馴染んでいた人だったと思います。もう一つはクロード・モネの「積み藁・雪の効果・朝」（1891年）＝図4＝。モネが雪を描いたのはおそらく日本の影響だと思われます。彼が生きた19世紀後半は、日本から浮世絵などの日本美術が大量に流出した時代でした。どうもモネはそういうものを見て、雪の美しさを絵で確認し、こういう作品にしたらしいです。

上から図2、図3、図4

3. 雪の画家 狩野山雪

■冬といえば雪を描くのが定番

ここで改めて、狩野山雪が描いた雪の絵を紹介していきたいと思います。さきほど雪月花の際にも触れましたが、日本の古美術の屏風とか襖絵では、四季を一つの作品で表すことが結構あります。その中

には必ず冬があるわけですが、冬といえば雪を描くのが定番であったということを、頭に置いておくといいかもかもしれません。そして普遍的に言えるのは、日本は本当に自然の風景を愛していたということです。春は桜の花見、秋は紅葉狩りをして、冬も雪を楽しんじゃうわけですね。

■奇想の表現があらわに登場

狩野山雪も探してみたら雪の風景を描いていました。「雪汀水禽図屏風」(江戸時代・17世紀、個人蔵・重要文化財) = 図 5 = は四季ではなくタイトルからして雪ですね。下の方は水鳥がいっぱい描かれています。



狩野山雪《雪汀水禽図屏風》(江戸時代 17世紀、個人蔵、重要文化財)



図 5

このあたりから奇想の表現があらわに登場します。この屏風は六曲一双と言って、六つ折りの屏風が二つでワンセットになっています。拡大してみると、鳥がたくさん描かれています。激しい波の中を、鳥が泳いでいるのが見えます。こういう細かい描写を見ていると楽しいです。鳥もなかなかいい感じで飛んでいて、視線が誘導されますよね。

片や上のほうは対照的で、秩序だって飛んでいる鳥が表されています。現実的にこういう形で鳥が飛ぶようなことはあり得なさそうですね。

山雪は非常にデザイン感覚に優れた人でしたから、こういう形に鳥を飛ばすことによって、自分の造形欲求を満たしたのだと思います。それによってこういう非常に面白い画面ができたということです。

これは月が出ているので夜の風景ですね。昔の日本の絵は 昼だから明るく、夜だから暗く描くというのではなく、太陽が描かれていたら昼間、月が描かれていたら夜という風に描き分けていました。そして月が描かれている絵でも、そんなに暗くない絵がたくさんあります。この絵はその中ではちょっと暗い方ですね。非常に情景感覚に富んだ面白い作品だということが分かると思います。下のほうの情景感覚もまた面白いですね。わざわざここに鳥を止まらせて、ちょっと十字型になっている感じです。「雪汀水禽図屏風」は家の屋根や細かい葉っぱの上に雪が積もっています。これは金地だから塗り残しではなく、絵の具を乗せているかもしれません。さっきのモネの絵も、もちろん雪の部分は塗り残しではなく絵具で描いています。比べてみると面白いですね。

■西洋美術は現実をそのまま描く

次は山雪の「雪中白鷺図」です。雪が積もった木の幹に白鷺が止まっています。上にたっぷり余白があるのが味わい深いです。西洋美術の風景画は基本的に画面全体を埋めます。つまり現実の風景をそのまま描くのです。しかし日本美術の場合は表したいモチーフを浮き立たせて描くので、世界が外に広がっているようにも捉えられます。あるいは背景は関係なく、自分の意識の中で鳥とか木が見えるという感じでしょうか。もちろん日本美術でも全部埋めているものもいっぱいありますが、こういう余白がある絵も非常に面白いなと思います。

次は「秋冬山水図」(江戸時代・17世紀) = 図 6 =。これはちょっと不思議なんです。ひょっとしたら春と夏が別にあり、それがもうなくなっちゃって、これはその中の冬の風景かも知れません。これもこういう山が現実的に存在したのかどうか疑問です。下のほうにロバに乗った人が雪を眺めています。景色を楽しんでいるのでしょうか。次は「雪中騎驢図」。ロバに乗った人が描かれています。この時代にロバは日本にいなかったと思います。中国にはいたので、中国の絵からの借用と思われます。中心人物の顔が描かれていないのはどうなのかとも思いますが、後ろ姿だからこそ味わいがあるし、山雪が造形美を楽しんでいることが分かります。



図 6

「林和靖・秋冬山水図」は中国の題材で、真ん中にいるのが林和靖で、左が冬の景色、右が夏の景色

です。中国の題材でも日本人の感性で楽しみながら描き、それが受け入れられていました。梅の木や岩の形も面白く、素晴らしいデザイン感覚です。「枯木ニ鳩図襖」は雪をかぶった古木にハトが止まっています。こういう作品は所蔵している寺が博物館などに預けることが多いですが、部屋にはまった状態で観ると全然違います。

■襖絵は元々の場所で観ると格別

私が山雪と出会ったのは大学生のころでした。そのころ感じた印象についてお話ししたいと思います。この絵は「妙心寺天球院方丈襖絵 朝顔図襖」（江戸時代・17世紀、妙心寺天球院蔵・需要文化財）



図7

=図7=で、金箔を張り籬（まがき）と朝顔が描かれています。これも現実の風景かどうかは疑問で、山雪の創作だと思います。観ていてとても幸せになる絵でした。さっきの「雪汀水禽図屏風」は曲線を使っていましたが、これは幾何学的な造形の感じがします。私は学生時代に天球院に行ってこの部屋に入り、襖を全部閉めて鑑賞させてもらったことがあります。そういうふうに鑑賞できるとものすごくいいということが実感できました。

■「奇想」という言葉でくくられた6人の画家

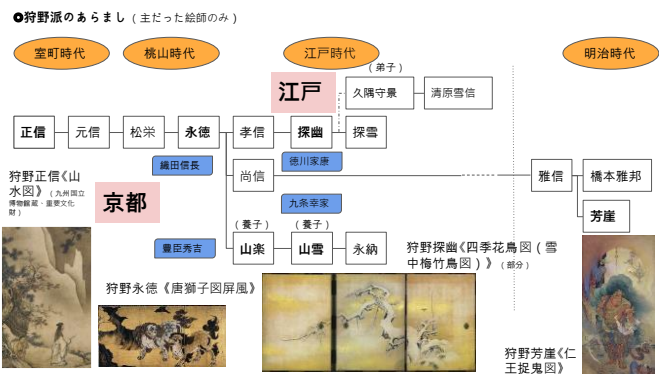
やはり天球院にある「方丈襖絵 梅に遊禽図襖」も、とても特徴的な作品です。実際の梅の木も曲がりくねっているものも少なくないですが、この絵の梅ほど変わっている造形が現実存在するのでしょうか。山雪はこういう形が好きなんだろうね。ちなみに、この造形はよく「奇矯」という言葉で表現されることがあります。

私が学生の時に習っていたのが辻惟雄先生という日本美術史の大家です。先生は1970年に「奇想の系譜」という本を書きました。その時に取り上げた画家が、岩佐又兵衛、狩野山雪、伊藤若冲、曾我蕭白、長沢芦雪、歌川国芳の6人。今はみんなメジャーな画家ですが、当時はあまり知られていなかった画家たちです。この6人に画派などの繋がりがあるわけではないのですが、奇想という言葉でくくることができる絵を書いていたんですね。先生は伊藤若冲発掘の立役者でもあります。

4. 狩野派について

■大和絵と水墨画の要素が合流して生まれた

では山雪の背景である狩野派について紐解いていきたいと思います。狩野派は狩野正信という人が興したことになっています。日本にはそれ以前に、源氏物語絵巻などで知られる「大和絵」というのがありました。平安時代に生まれ、非常に柔らかく、雅やかな表現をする絵でした。そこに中国から水墨画の系譜が入ってきました。さっき出た雪舟は水墨画の系譜に属しています。そして大和絵の要素と水墨画の要素を合流させて生まれたのが狩野派です。狩野派が生まれたのは室町時代で、正信が興して元信がいい感じに育て、織田信長の時代に永徳がかなり大成させました。その代表作が「唐獅子図屏風」ですね。



■江戸狩野と京狩野に別れる

江戸時代に入ると永徳の次世代から江戸と京都に別れていきます。江戸のほうの狩野派は幕府がお抱えの絵師にしており、狩野探幽は徳川家光に絵を教えたりしています。一方、京都に残ったのが山楽、



上から図8, 図9, 図10

が所蔵しています。狩野派は武家につく画派ですから、武家にふさわしい勇壮な絵が好まれたということはあるようです。狩野探幽の「四季花鳥図（雪中梅竹鳥図）」（1634年、名古屋城障壁画・重要文化財）＝図8＝は四季花鳥図ですから春夏秋冬の4つがあり、これはその中の冬の場面ですね。さっき見た円山応挙の「雪松図屏風」にも通じる絶妙な作品です。次は久隅守景の「納涼図屏風」。彼も狩野派ですが、ちょっと変わった絵を描いた人です。狩野芳崖には「仁王捉鬼図」や「悲母観音図」などがあります。

■日本にいなかった虎を想像で描く

山雪の義理の父親である狩野山楽の「龍虎図屏風」（江戸時代・17世紀、妙心寺蔵・京都国立博物館寄託）＝図9＝は本当にいい絵です。龍虎を描くというのは中国の影響で、このころの定番とも言えますが、この時代に日本に虎はいませんから、空想上の動物のように描いたのでしょう。ヒョウも描かれていますが、この時代はヒョウも虎の一種だと思われていたようです。

さて山雪ですが、まずは「騎獅文殊図」（江戸時代・17世紀、ミネアポリス美術館蔵）＝図10＝。これはちょっとおとなしくなった獅子の上に文殊様が乗っています。狩野永徳の「唐獅子図屏風」の獅子は怖い顔をしていましたが、「騎獅文殊図」の獅子はおちゃめな顔をしており、比べてみると面白いです。同じ狩野派でも個性が出るのですね。

■幾何学的造形を追究した「あり得ない梅の木」

山雪には幾何学的な図形をとる傾向が濃厚にありました。極めつけは「老梅図襖」（1647年、メトロポリタン美術館蔵）＝図11＝。本当にこんな梅があるのかと思いますね。こういう絵は注文で描いていると思いますが、やはりこういうのを描きたくて描いたのでしょう。「盤谷図」は激しく、幾何学的な絵柄で、造形的な美しさを追究しています。京狩野家伝来の家宝ということなので、人のためというより自分の家のために描いたのだと思われます。「出山釈迦図」はいろんな画家が描いていて、静かな絵が多いですが、これはなかなか面白い造形で、やはり奇想が入っていると思います。「観音天龍夜叉図」も山雪ならではの興味深い造形が見られます。「群仙図襖」（旧天祥院客殿襖絵、江戸時代・1646年、ミネアポリス美術館蔵）＝図12＝は中国の故事に基づい

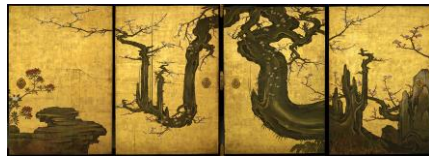


上から図11, 図12

山雪、永納らですが、山楽も山雪も養子ですので血のつながりはありません。狩野派は江戸のほうが主流になったので、ただ狩野派というと江戸の狩野派を指し、京都の方は「京狩野」と呼んでいます。京狩野には徳川は関与しませんが、貴族に仕えたりしていたようです。江戸狩野では、探幽の弟子に

久隅守景がいて、清原雪信につながっていきます。幕末になると有名な狩野芳崖が出てきます。

では狩野派の面々の作品を紹介しましょう。ルーツである正信の「山水図」は雪の絵です。永徳の代表作の「唐獅子図屏風」は国宝で、三の丸尚蔵館



左から図13、図14

て、たくさんの仙人が群れている様子が描かれています。遊び心が満載されていて、例えば右端の絵では一人の仙人が石をひもで吊り下げ、カエルみたいなのが飛びつくの誘っています。造形的な面白さもいたるところに出てきます。山雪以外では、狩野永岳の「獅子の児落とし図」や曾我蕭白の「石橋図」。

いずれも獅子が子どもを崖から突き落とすという伝統的な画材を描いています。

■裏表だった絵のラインがそっくり

ここで私的な発見があったことをお話します。いまの「群仙図襖」はもともとは「老梅図襖」の裏面に描かれていました。それはまだ私の発見ではありませんが、それがはがされ、現在は別々に仕立てられて保存されています。そこでまず「群仙図襖」の形をなぞってみました(図13)。それを「老梅図襖」と比べたのが図14です。かなり似ていますよね。もちろんたまたま似た可能性も否定はできませんが、同じ襖絵の表裏ですから意図したものだと思います。こういう現象からしても、すごく形にこだわる絵師だったことが分かります。

5. 山雪のお茶目



図15

最後に山雪におちゃめな面があったことに焦点を当ててみましょう。「松に小禽・鼻図」(江戸時代前期・17世紀、滴翠軒記念文化振興財団蔵、府中市美術館寄託)＝図15＝などに描かれているフクロウがとても可愛く、人間っぽくて、素晴らしいです。頭が大きくて、知恵がありそうです。そのフクロウに小鳥が上からちょっかいを出そうとしています。ひょっとしたらこのフクロウは、山雪の自画像ではないかとも思ったりします。

■京都に残ったからこそできた？

山雪は狩野派の中でも特殊な画家だったと思います。造形美にこだわりながら、面白さも追求した。それは京都に残っていたからこそ出来たのかもしれない。江戸にいるともうちょっと縛られて、違う画風になった可能性はあります。人格的にもかなり個性的だったと思われます。辻惟雄先生の「奇想の系譜」によって、伊藤若冲だけでなく狩野山雪も大いに顕彰されてきましたが、私としてはこの面白い画家の顕彰をさらに続けていきたいと思っています。

【質疑応答】

■京狩野はお公家さんのお抱え絵師

Q 江戸狩野は幕府がパトロンでしたが、京狩野はどうだったのでしょうか。

A 江戸狩野のすべての絵師が徳川の御用絵師になっていたわけではなく、大名に仕えていた絵師もいました。京狩野はお公家さんのお抱え絵師になっていました。

■絵師は武士と同じくらいの高い身分

Q 絵師たちの身分は士農工商のどの位置にあったのでしょうか。

A 狩野派は200石くらいの石高を与えられており、武士と同じくらいの高いレベルの扱いを受けていました。世界的にみると宮廷画家に近い感じかもしれません。また、給料をもらっていたということは、ある意味サラリーマン画家だったということです。しかし考えてみたら、行政が画家を雇用するというのは、現在ではありえないような画期的なことだったと思います。

■純粋なパトロンは日本では少なかった

Q お能など芸能関係の人たちにはパトロンがいたのですか。

A お能は大名自身が楽しんでいたので、庇護されていたと思いますが、詳しいことは知りません。歌舞伎は純商業的にやっていたと思います。狩野派以外の画家たちは絵を描いてお金をもらっていましたが、浮世絵師は版元（出版社）から注文を受け、画料をもらっていました。純粋なパトロンは日本では少なかったということですね。

■常識を打ち破った作品には価値がある

Q 落書きのような作品がなぜ何億円もの値段がするのでしょうか。

A 落書きのような絵というまづピカソが思い浮かびますが、日本でも歌川国芳がそんな絵をわざと描いています。彼が生きた時代は経済状態が悪く、ぜいたくが禁止され、歌舞伎もその対象となり、歌舞伎役者を描く浮世絵も禁止されました。そこで国芳はものすごく下手に描いたんです。ものすごくうまい画家なのにもものすごく下手に描いたというのはピカソにも通じます。しかし下手な絵と言っても、ピカソのキュビズムのように、視点を変えたことで新しい発見があり、高く評価された画風もあります。美術の歴史というものが、常識を打ち破るということに価値を認めてきたからですね。事実、名を残している有名な作家は、ことごとく常識を打ち破っています。私が書いた「美術の経済」で紹介しているサイ・トゥオンブリーという画家の作品は、落書きと言うよりもボールペンの試し書きのように、ただぐるぐる描いたような絵なのです。私も最初に観た時、「どこがいいのか。どこが芸術なのか」と思いましたが、ほかにそういうことをした人はいません。そして、何かを描くという気持ちを突き詰め、無駄を排除してそれが生まれたのかと思うと、その絵がすごく面白いものを感じられるようになりました。そうした絵にまつわる話が付加価値として加わっていく中で、経済的価値も説明できるようになってきたのではないのでしょうか。分かりにくい作品でも、それに向き合って、いろんな知識を仕入れていくと、だんだんと美を感じられるようになる。それは素晴らしいことで、人生が充実すると思います。

小川 敦生（おがわ あつお）先生のプロフィール

1959年北九州市生まれ。東京大学文学部美術史学科卒業。日経BP社の音楽・美術分野の記者、「日経アート」誌編集長、日本経済新聞美術担当記者等を経て、2012年から多摩美術大学芸術学科教授。「芸術と経済」「音楽と美術」などの授業を担当。一般社団法人 MusicDialogue 理事。

日本経済新聞本紙、NIKKEI Financial、ONTOMO-mag、東洋経済、Tokyo Art Beat など多くの媒体に記事を執筆。多摩美術大学で発行しているアート誌「Whoops!」の編集長を務めている。

これまでの主な執筆記事は「パウル・クレー 色彩と線の交響楽」（日本経済新聞）、「絵になった音楽」（同）、「ヴァイオリンの神秘」（同）、「神坂雪佳の風流」（同）、「画鬼、河鍋暁斎」（同）、「藤田嗣治の技法解明 乳白色の美生んだタルク」（同）、「名画に隠されたミステリー！尾形光琳の描いた風神雷神、屏風の裏でも飛んでいた！」（和楽 web）など。著書に『美術の経済』（インプレス）。